

平成 23 年 9 月 22 日

浜田市議会議長 牛尾 博美 様

視察報告者 平石 誠

視 察 報 告 書

下記のとおり、視察を行いましたので、その結果を報告いたします。

記

1. 期 間 平成 23 年 8 月 1 日 (月) ～8 月 3 日 (水)
2. 視 察 先 福島県相馬市
3. 参 加 者 牛尾博美議長 ・ 川神裕司副議長 ・ 江角敏和
西田清久 ・ 佐々木豊治 ・ 芦谷英夫
岡本正友 ・ 布施賢司 ・ 笹田 卓
平石 誠

4. 調査の概要

- ・ 東日本大震災にかかる災害対応について

5. 視察先の概要

相馬市は、福島県の浜通り北部に位置する都市である。江戸時代には相馬藩 6 万石の城下町として栄えた。県庁所在地の福島市 (55km) へは国道 115 号で、北の仙台市 (55km) と南のいわき市平 (95km) へは、南北に貫く常磐線・国道 6 号で移動する事が可能である。しかし、福島市や平よりも、県境を跨いだ仙台の方が移動に便利であり、常磐線で 1 時間程度で行ける。総務省統計局による都市圏基準でも新地町と共に「仙台大都市圏」に含まれるため、仙台市のベッドタウンと見る事もできる (宮城県の地上波デジタル放送は、相馬もサービスエリアになっている)。相馬野馬追が有名であり、当地の藩主であった相馬氏との縁は深く、近代まで相馬野馬追の出陣式に相馬氏の当主を招いていた事からも伺える。また、相馬氏が馬の紋章を用いた事に因んで、市街地には馬の銅像が点在する。

また、二宮尊徳が飢餓・飢饉に陥った各地の村々に仕法 (村興しの有効策) を行った土地でもある。相馬中村城跡にある相馬神社は、妙見菩薩と平将門を奉る神社として今尚参拝者が多い。相馬盆唄など、多くの民謡の発祥地でもある。(Wikipedia より引用)



6. 視察内容

8月1日 午前9時相馬市視察の先発隊を追って、川神副議長とともに新幹線にて相馬市へ向かった。東海道新幹線から東北新幹線に乗り換え、仙台駅が近くなるにつれ、車窓から見える景色は大震災から5カ月を迎えようとしているなか、痛々しい爪痕がいたるところに残っていた。

広島駅から7時間で仙台駅へ到着。常磐線にて一路相馬市へと行きたかったが、途中亘理駅以南はあの津波により運行できない状況であったため、いったん亘理駅まで行き、そこから代替バスにて相馬市へ入った。常磐線（仙台駅から亘理駅まで）からは海岸線は確認できなかったが、津波のものであろう瓦礫が線路近くまで流れ着いていた。亘理駅からはバスでの移動となったが、相馬市へ近づくにつれ海岸線に近くなっているようで、津波の被害に遭われた家屋や工場が目につくようになった。津波の被害には遭わなかったものの、震災により屋根が壊れた家屋は、応急処置のためにブルーシートをかけてあったが、震災から5カ月でも未だに修繕がなされていないということが、被害の大きさを改めて感じさせられた。そんなこんなで相馬市に到着、先発隊と合流し夕食後、この日の宿泊先へ移動。宿泊先は海沿いとのことであったが、日が暮れていたので景色は全く見えなかったが、車のライトが照らす海沿いの道には、津波により打ち上げられた船舶が点々としており、津波のすごさを感じた。宿に到着後、この日は終了。

8月2日 午前4時外の明るさで起床。周辺を散策することにした。昨晩は気付かなかったが、宿は松川浦という入江のすぐ近くに建っていた。宿から見える景色は震災前には素晴らしくきれいであったであろう、入江、その向こう沖合には南北数キロに亘る松林、が目に入った。しかし、入江には転覆した漁船、沖合の松林は、津波によりあちこちで寸断されていた。宿のすぐ下のホテルや事務所なども一階部分が骨組みのみが残った状態であった。瓦礫などは片付けてあったため、余計に骨組みが目立っていたように思う。少し歩いていると、漁師さんであろう方たちの車に、何十台もすれ違った。またしばらく歩いていると、先ほどの漁師さんたちが漁船で松川浦から沖合へ次々と出ていく光景に出くわした。その時は、震災から5カ月たっているんで、漁もできるようになったんだなあと思っていた。しかし後で聞いてみると、松川浦沖合で採れたヒラメからセシウムが採取されたため、漁はしていないとのことであった。ではなぜ海に出ていくのかをお聞きすると、補償（対国か東京電力かは不明）の関係で、毎日漁に出たという実績が必要であるとのことであった。松川浦にかかる橋の上から、沖合を眺めると、手前の防波堤の上に漁船が数隻打ち上げられており、その向こうの沖合には漁船がせっかく無事だったのに仕事ができない状態でただ、浮かんでいるというなんともいいようのない虚しさを感じた。橋の下には、市場や水産加工団地であったであろう広場があり、津波により何もかも流された跡であった。その向こうには片づけられた瓦礫が山積みになっており、近づいてみるとかなりの異臭を放っていた。この日は結構涼しかったが、あの真夏の暑さの中では相当のものだったと思われた。

一通り、漁港近辺をまわった後、宿にて朝食をとり、海岸沿いの被害状況を視察した後、震災後、いち早く被災者支援活動を実施されたNPO団体の方に、活動状況の話をお

聞きした。この方は、鎌倉時代から幕末までこの地方を統治してきた、奥州相馬氏の34代目当主、相馬行胤氏である。行胤氏に支援活動の経緯や状況等をお聞きした。支援活動については、「相馬の民に難あれば当主として民を守る」という代々受け継がれてきた当主として当然あるべき姿ということであった。行胤氏は北海道在住であり、有事の時は帰省し指揮をとられ、普段は城址にある相馬中村神社の宮司さんが留守をあずかっているとのこと。支援活動は、この中村神社を拠点に、救援物資の配布や瓦礫撤去、福島第一原子力発電所事故により立ち入りが規制された地域の家畜やペットの世話(立ち入り制限がかけられるまでの間)等を行政とは別に実施された。行政とは別に実施という点で注目すべき点は、行政側の救援物資は数がそろわないと出せないとかきまり一辺倒の物資ばかりで、なかなか必要とされている人の元に届かない状況のなかで、全国から中村神社へ送られて来る物資を即座に配布していたことであろうかと思う。小さな組織ならではの対応力かもしれないが、こういった活動こそ、必要とされる活動であろう。支援活動の中のエピソードとして、保育園で支援物資を園児に与えたところ、全部食わずに残す子がいて、何でと聞いたところ、持って帰ってお家の人にあげるんだと言った子がいた、とか、老人宅に飲料水を配ったところ、殿さまからの頂き物だからといって神棚へ供えてしまい飲もうとしない方がいたとかお聞きした。何代も続く相馬氏ならではの話であった。その後、南相馬市周辺の視察を実施し、夕方、相馬市長との懇談を実施した。

相馬市役所は海岸部からは離れた場所に位置していたため被災は免れていた。相馬市長は、ご自身の実家が津波により被災されていたが、地震発生後から不眠不休(話の内容から3日はつきっきりだったように思う)で災害復旧指示にあたられた。市長は地震発生後、津波警報が出されたことで、消防団員に海岸部での注意喚起を実施するように命じられ、その結果、多くの殉死者を出したことに心を痛められていたように思った。災害対応では、被災直後に、災害対応、復興プランを早期に組み立て、それに基づきこれまでの5ヶ月間をやってこられたとのことであった。被災者支援では、市長自ら全国の知人に電話をし、支援物資を集められ配布されたとのことであった。時には前述の相馬行胤氏にも協力を仰いだりもしたとのこと。全国から集められた支援物資については市長室の壁に貼り出されていた。今後は当初の復興プランを忠実に実践していき、被災者支援、被災地復興に努力していくので、全国民がこの大震災を風化させることなく、復興支援に協力いただきたいとのことであった。

われわれ相馬市を訪問した議員だけでなく、浜田市議会、浜田市として、被災地に対し今後どのような支援ができるのかを、再考することが必要かと思う。また、自身としても何ができるのか、何をすべきかをもう一度考え、また、訪問も考えてみたい。

以上